

篠屋宗礪覚書

—近世初期、京洛の一儒生の事績をめぐって(下)—

* 長坂成行

要旨

近世初期、慶長から元和にかけて京都に篠屋宗礪という儒学者がいた。ほとんど無名の存在だが、断片的な資料からその交際圏を探ると、里村紹巴・惟杏永哲・剛外令柔・文英清韓・林羅山・松永尺五・烏丸光広・中院通勝・通村・西洞院時慶・智仁親王など、連歌界・五山禅林・儒者・公卿・官廷と広範囲かつ当時第一級の文化人に及ぶ。また、施業院宗伯・曲直瀬玄朔らとの交流から医の世界にも属した人物であったことがわかる。近衛家や五山詩僧の聯句の会に招かれるだけでなく、古典の書写・筆跡にも関心を持ち、『源氏物語』『百人一首』など古典講釈の会に参加、自らも智仁親王に『史記』『孟子』『三略』などの漢籍を講じている。そうした学識の故か、加藤清正に招かれ肥後に赴き、のちには加賀の前田利常の許にも出入りし、中院通村に源氏抄の作成を依頼する仲介役も務めている。龍安寺の傍に多福文庫を構え群書を蒐集、その中に、一時期西源院本『太平記』も蔵されたらしい。以下、五〇件ほど探索し得た彼の事績から判断すると、宗礪は近世初期の京都における儒者・文学者として高い評価を受け、しかるべき地位を占めていたものと思われる。

(続き、本稿(上)は「奈良大学紀要」三四号に掲載)

〔二五〕慶長一八年(二六一三)八月九日、宗礪、智仁親王に講釈。

〔依拠資料〕「智仁親王御年曆」(書院部紀要)二〇号、一九六八・一一、九七頁下。『圖書寮叢刊 智仁親王詠草類三』二〇〇一・三、三三三〇頁下。講釈した書名はなし。

〔内容〕「八月九日、宗礪講尺」(三二九頁上)。

〔備考〕この直後、文英清韓が『東坡集』を講じている。八月一〇日、禁裏にて後水尾天皇に進講、智仁親王・中院通村も聴聞。一八日以降一〇回近く八条殿(智仁)にて『東坡集』講釈(言緒脚記・鹿苑日録)。

〔二六〕慶長一十九年(二六一四)三月八日・一五日、延寿院に講釈聴聞に行き、西洞院時慶と同居する。

〔依拠資料〕「時慶記」同日条、但し『大日本史料』一二之一七、慶長一十九年雜載による。

〔本文〕「八日、天晴、延寿院へ講尺二行、六条へ遣し状、隙入ト、講ノ後、愛宕ノ教學院ノ三位、振舞トテ被リ留、相伴候、篠屋ノ宗礪・大喜等也、心静有「物語」、庭ノ花盛也」、「十五日、天晴、延寿院へ講

尺聴聞二出、一所廿一篇二、点不審ノ義、宗礪与予ニ被レ語、尤ノ旨申候、彼亭ノ牡丹咲出候」(三四四頁)。

〔内容〕延寿院は、当代の名医曲直瀬玄朔(二世曲直瀬道三、一五四九、一六三二)、時慶は正月三日にも延寿院で「素問」(中国最古の医書、黄帝素問)を聴聞している(三四三頁)。曲直瀬玄朔の事蹟は矢数道明「近世漢方医学史 曲直瀬道三とその学統」(一九八二・一二、名著出版)参照。教学院は愛宕神社の坊舎の一つ、教学院三位は未詳だが慶長一六年三月六日、同一七年五月二八日、六月一二日に鹿苑院に出入りしている愛宕教学院が該当か(鹿苑日録)。大喜は不明。西洞院時慶は市井の医者としての側面も有したとい(「国史大辞典」一〇・二六八頁)、例えば元和七年(一六二二)五月には東福寺の集雲守藤(七月四日没)の病気を診察している(大日本史料一三之三、一八頁)。この記事は、宗礪が儒者にして医を兼ねるいわゆる儒医であることを示すひとつの徴証といえる。

〔二七〕慶長一九年(一六一四)七月中旬、玄仲、宗礪老の求めに応じて「源氏物語」松風の巻を書写。

〔依拠資料〕「玉英堂稀観本書目」一三九号(一九八一・四)六頁。木藤才藏「連歌史論考 下 増補改訂版」(一九九三・五、明治書院)一〇九三頁に指摘あり。

〔本文〕奥書に「宗礪老依三所望二不レ省二愚筆一令二書写二畢ノ慶長十九年初秋中旬ノ法橋玄仲」。

〔備考〕法橋玄仲(一五七八、一六三七)は紹巴の二男で、慶長一二年(一六〇七)四月二三日に没した玄仍の弟。幕府連歌師として里村北家を支え、寛永一五年(一六三八)二月三日、六三歳で没。

〔二八〕慶長二〇年(一六一五)一月二日、宗礪帯一筋を持ち、年始に中院通村の許を訪れるも、通村は宗礪に対面せず。

〔依拠資料〕「中院通村日記」同日条(東京大学史料編纂所三三七三・一三・一)。

〔本文〕「笹屋宗礪来、帯一筋進レ之、不ニ対面」(二オ)。

〔備考〕この項、日下幸男「中院通村と儒学儒者」(「みをつくし」五号、一九八七・一〇)一四頁、同「中院通村年譜稿—中年期(上)—」(「国文学論叢」四八輯、二〇〇三・三)一八頁に指摘あり。

〔二九〕元和元年(一六一五)八月八日より、宗礪、智仁親王に孟子講釈。次年六月三日まで。

〔依拠資料〕「智仁親王御年暦」(二二五)に同じ。

〔本文〕「八月八日より孟子之講尺宗礪二聞」。

〔備考〕これに関連するものとして以下の資料あり。ただし小高道子「智仁親王の漢文学—古今伝授後の智仁親王—」(「近世文学と漢文学 和漢比較文学叢書7」(一九八八・六、汲古書院)による。宮内庁書陵部に「聴書類」(桂、一一冊、五〇三・一三三、目録四三五頁下)あり。智仁親王の聞き書で、外題に「孟子聞書」とある一冊の冒頭に、「孟子聞書、

元和元年仲秋八日、ノ宗彌諱」とあり、以下余白に「九日、十日、十三日、十六日、廿二日、廿三日、廿六日、晦日、九月二日、六日、八日、十日、十二日、十三日、十八日、廿二日、廿四日、廿六日、廿八日、卯月廿八日、五月二日、五月六日、五月十日、同十四日、同十七日、同廿日、同廿三日、同廿六日、同廿九日、六月三日」。

〔三〇〕某年九月二三日、休閑より耕庵宗彌老人あて書状あり。

〔依拠資料〕「筑波書店古書目録」四六号（一九九三年春頃）、一頁。NO

2、図版あり。巻紙を上下二段に継いで後に書したものである。全文一筆、慶長頃。以下、段落は私による。

〔本文〕

爾来音耗疎闊、不_レ耐_二景_一ノ慕_一、去夏過_二高軒_一、立_二談_一纒ノ廣厦下_一、經營事落成否、ノ小子仕途躑、常貧窮無_レノ隙、終不_レ見_二輪奐之美_一、不_レ効_二燕雀之賀_一、良有_レ以_レ哉、ノ

小子自_二去月初_一、入_二傷風国_一ノ踞_二病床_一者五十余冀乎、ノ以_二薬功_一病鬼暫去、経_二五六日_一ノ入_二湯浴室_一洗_二除病垢_一、以_レ太早ノ計、自_二翌之日_一、復得_二再発_一入_レノ冥幾度、雖_レ然恁_二應意安_一ノ法眼、以_二靈薬力_一、病鬼去_二天ノ涯_一、今則安矣、余氣猶添食ノ味如_二嚼蠟_一、形容枯槁、垢面蓬ノ頭、三閭邪餓鬼、誰敢_レ弁_レ之、ノ可_レ憐生也、々々々々、小奚奴路ノ遠、則薬信動隔_二日有_一断、ノ以_レ故病中鞏下、憊_二蝸屋ノ近_一良医門_一、

病余日永無_二ノ約消之材_一、公有_レ望_二蒙_一ノ許可_一、則大慈与楽大悲

拔ノ苦乎、先年触_レ耳幻書一三ノ〔以下裏〕冊拔萃、在_二龍眠_一（コノ二字ミセケチ）剛外和尚ノ公案秘_二焉_一、小子所_レ知也、若_レ以_二高ノ慈_一（一二冊預_二恩借_一、涉_二獵送_一ノ居諸、則何賜加_レ之、天幸々々、ノ余椿無_レ尽束_二而閣焉_一、維_レ時ノ殘菊傲霜、早梅小春、自_レ愛珍瀆、恐惶不宣、ノ季秋廿二冀 休閑（花押）ノ

拝覆 耕庵老人 鳥皮几下ノ

楮国有_二余白_一、以_二狂句一代ノ野詩_一ノ

吁吾多病孟ノ始信故人疎ノ

宗彌老人

〔内容〕無沙汰の挨拶にはじまり、落成祝いに不義理をしたのは病のゆえという。先月初めから五〇余日の病氣のこと、回復と思ひ入浴したらぶりがえしたと、意安法眼の靈薬のおかげで快方に向かったこと、病余退屈だから幻の書の一、二冊拝借したい。それを読みあさり月日を送るならば幸い、など。

〔備考〕

*冒頭近くの「經營の事落成や否や」「終に輪奐之美を見ず」「燕雀之賀を效さず」というあたり、宗彌が家を建築中だったと解してよいのだろうか。とすれば、〔四四〕松永尺五の宗彌追悼文中の龍安寺辺の新居をさすのか。「古書目録」は本状を「慶長頃」とするが、あるいは宗彌が加賀から帰って以後のものと考えてもいいのかもしれない。

*意安法眼は角倉了以の弟で、豊臣秀吉・秀次、徳川家康らに仕えた医師吉田宗恂（一五五八―一六一〇）か、あるいはその息宗達（一五八

四一六二二)か。本書簡の年代特定が困難なので未詳だが後者の可能性が高いか。

* 剛外和尚(二五六三〜一六二七)は既出(三三)(七)。龍眠は剛外の住庵(東福寺内)。

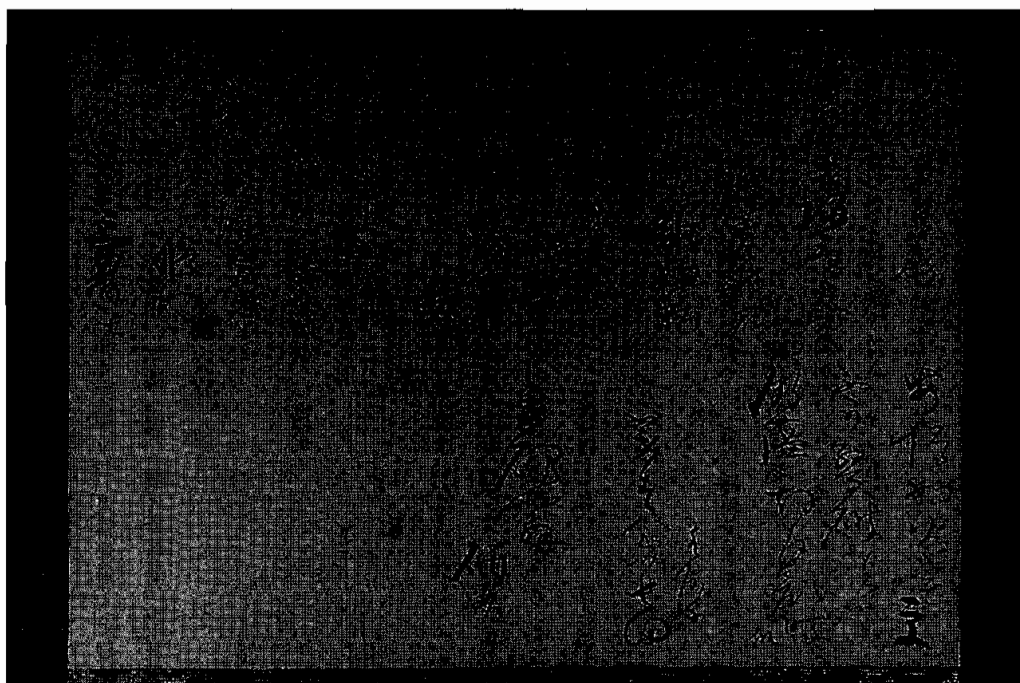
* 休閑の名、以下に見える。「鹿苑日録」慶長一〇年(一六〇五)正月一日条に雲泉軒での聯句会に出席(四・二三三頁上)、「連歌総目録」六六九頁の慶長六年(一六〇二)九月一日、何路百韻に休閑七句(大阪天満宮 九五・二五)、同七〇七頁の慶長一二年二月一日白山万句のうち百韻に一句(白山比咩神社四六六)。「林羅山年譜稿」四一頁に、休閑の歳旦詩に和す。詩集一五、一六二「慶長年中」。

〔三一〕年次未詳、三月二四日、水宿子長向禪師より宗礪翁あて書状あり。

〔依拠資料〕架蔵。「弘文荘名家真蹟図録」待買古書目四三号(一九七二・六)八九頁、NO一一五。「弘文荘古文書目録」待買古書目四四号(一九七三・一)、二五〇頁、NO二二九。「筑波書店古書目録」七九号(二〇〇五・四)四三頁、NO二〇八。

〔本文〕

「美身尊酬 右／從賀州帰京之旨／承候間、染禿翰候、／不慮之火難、御私／宅并書籍以下迄／焦土成矣、憤思千／萬二候、併胸中之／万卷至宝二候、当／津国丙丁童徘徊以故、到官家／民家不隔昼夜／趣、有道之修行／此時二候、三界無／安猶如火宅、



宗礪翁あて水宿子長向書簡

更ノ不レ可_レ驚破_レ者也、／余蘊期_二拜顔時_一候、／暮春念四(三月二十四日) 水宿子 長向ノ宗嗣翁ノ研石

〔内容〕火災にあつた宗嗣への見舞い。「弘文荘古文書目録」二五〇頁に「撰津の僧長向から宗嗣あての折紙書状」、「前田家に伴して金沢へ下つた宗嗣が、彼の地で火事に逢い、多年蒐蔵の書籍等を焼失した事実が知られる。慶長後半のものであらう」とある。が金沢で火災に遭つたとせず、京都での火事としてもおかしくない。宗嗣が家を新築したことについては〔三〇〕〔四四〕を傍証にできるか。「当津国丙丁童徘徊」とあるあたり、「丙丁」は火のこと、撰津では放火が多いといふのであらうか。

*年次未詳、宗嗣が加賀から帰京とあり元和のはじめ頃か。

*水宿子長向が誰なのか、極めて独特の字体だが不明。被災を見舞いつつ自身の述懐も見せ、かなり親しい間柄と推測される。

〔三二〕慶長末・元和初め頃。中院通村より宗嗣あて書状あり。

〔依拠資料〕「弘文荘待買古書目」二二二号、(一九五二・七) NO 一七九、図版なし。「弘文荘名家真蹟図録」待買古書目四三三号(一九七二・六) 九八頁、NO 二二二、図版あり。「弘文荘古文書目録」待買古書目四四号(一九七三・一) 二二九頁、NO 二二八、図版あり。

〔本文〕「加州へ之状之事、昨申候き、／好便何比候哉、承度候、兼又ノ万葉第少用之事候間、暫可_レ返給_レ候、第三も無_レ所用候者、一覽ノ申度候、被_レ点懸_レ候は不_レ苦候、但即時ノ可_レ借遣_レ候、次、紅

梅何方へも被_レ詛候哉、若書生無_レ之候ば、可_レ染_レ惡筆_二之由、申候者候間、料紙ノ可_レ給候、急速ニ出来候様、可_レ才学_一候、／かし／ノ宗嗣参 中

〔内容〕「万葉集」返却の要請、「源氏」紅梅書写の件。

*「弘文荘名家真蹟図録」に「奉書紙堅て書き(弘文荘待買古書目二二二号によれば、紙高三種、横四四種、一〇行)。通村の壮年時代、慶長末・元和初め頃のもの。貸した万葉集を一寸返してほしいといひ、また源氏物語の紅梅の巻の書写をまだ外へ頼んでないなら、こちらで書いて上げるといふものがあるから、紙を届けてほしいなど申送つて居る。あての宗嗣は既出の五山の僧たちの手紙からも想像される様に、富裕な儒医であつたのであらう。署名は「中」の一字である。」(九八頁)。

〔三三〕慶長末・元和初め頃。中院通村より宗嗣あて書状あり。

〔依拠資料〕「筑波書店古書目録」四六号(一九九三年春頃)、NO 1、図版あり。縦二八糎横三七糎、一通、台紙貼り。全文一筆、自筆書状。端裏に「宗嗣参 中」の宛名と署名記。

〔本文〕「昨晚之書中ノ今朝坡見候、一卷則ノ使者衆ヲ帰候由候、其外ノ候哉、如何様之物候哉、未ノ抑留候者可_レ欠給_レ候歎、／為_レ其申候ノ(追而書) 此中不_レ得_レ隙候而ノ疎闊_二候_一。

〔内容〕昨夜、宗嗣に頼まれた書を通村が見て返却する旨。他にどんなものがあるかの問い。筆跡の鑑定か、あるいは添削か。

〔三四〕元和二年(一六一六)三月二十九日、宗嗣、中院通村を訪う。

〔依拠資料〕「中院通村日記」同日条。

〔本文〕「午下刻宗嗣来、自旧冬下向于賀州、去月下旬上洛、其後南都下向、仍無言之由也、生龜(あわび)十帯一筋恵之、良庵始而參会云々、…宗嗣言談移刻、言談云於駿府烏黃門(光広)詠曰／心あてにみてや、みなんふしのねは雲より上の雲を桜と／又此哥歎別歌歎、三西大(実条)許へ被レ触候処無返答、重而よしやあしやと被レ申送云。余其答有無不聞。未下刻許帰了」。

〔内容〕

宗嗣は元和元年(一六一五)一〇月に加賀下向、二年二月下旬上洛。

〔三八〕によれば元和二年一〇月にも加賀下向。

〔備考〕

本項については、日下幸男「中院通村と儒学儒者」(「みをつくし」五号、一九八七・一〇)一五頁、高梨素子「烏丸家の人々―光広を中心に―」(「近世堂上和歌論集」所収)一二四頁に指摘あり、後者は光広詠の問題に關して言及する。

〔三五〕元和二年(一六一六)五月二日、智仁親王に「史記」講釈す。

同六月三日、智仁親王への講釈終る。

〔依拠資料〕「智仁親王御年曆」(二二五)に同じ。

〔本文〕「五月二日、宗嗣二吏(史カ)記之講尺聴聞ス、六月三日、講尺終、珍重」。

〔三六〕元和二年(一六一六)五月三日、中院通村、前日女院より賜つた鯉を、宗嗣の許に遣わす。

〔依拠資料〕「中院通村日記」同日条(東京大学史料編纂所三三七三・一三・一)。

〔本文〕「陰及晩雨降、辰下刻許退出、昨日鯉魚遣宗嗣許」(八三ウ)。

〔内容〕同五月二日の条に「自女院御所賜鯉生放置水桶」とあるものらしい。この時点での女院は新上東門院、勸修寺晴右女、陽光院夫人藤原晴子、後陽成天皇・智仁親王生母、慶長五年(一六〇〇)二月二十九日宣下、元和六年(一六一〇)二月十八日崩。

〔三七〕元和二年(一六一六)九月七日、智仁親王へ講釈。

〔依拠資料〕「智仁親王御年曆」(二二五)に同じ。

〔本文〕「九月七日、宗嗣講尺」。

〔備考〕書名なし。

〔三八〕元和三年(一六一七)五月一三日、中院通村を訪う。松平筑前守(前田利常)の依頼で源氏抄を求む。

〔依拠資料〕「中院通村日記」同日条(大日本史料二二之二八、六三〇頁)。

〔本文〕「未刻許後屋宗嗣来、自去年十月下向加州、加賀宰相松平筑前守東閣下向故、令上洛云々、去年歎、就子、子被レ求源氏抄、其事等言談、文字少シテ(異体字)義理分明之抄物所望云々、難計会」

之由答_レ之、然共明星抄可_レ書遣_レ之旨示_レ之、予猶令_レ新作授与_レ者、可_レ為_レ祝着_レ之由、自_レ去年_レ内々被_レ示_レ之、雖_レ然公私不_レ得_レ陳之間難_レ叶、於_レ得_レ陳者、予亦内々可_レ抄出_レ之義、挿_レ心中_レ之由答_レ之。

〔内容〕

中院通村は前田利常の学問の師であり(日下幸男「俊成・定家・為家本伝来管見」、『中世文芸論稿』五号、一九七九・五など参照)、宗彌を通じて、文字が少なく意味明瞭な源氏注釈を求めてきたのである。思いつかないと答えたが、『明星抄』(通勝の祖父、三条西公条の源氏開書)を写すことにし、隙を見つけて心がける、という趣旨。

*前田利常は慶長一〇年(一六〇五)四月八日従四位下侍従兼筑前守に叙任、松平氏を許される。元和三年(一六一七)五月一三日、秀忠は前田利常邸を訪れており、利常の在江戸がわかる(史料綜覧一五)。

*通村には利常から源氏絵の注文依頼もあり、土佐勝左衛門にその下絵を描かせている(『中院通村日記』元和二年正月二日・二月二日・三月二日条、『大日本史料』一二之三四、九三五頁)。

〔備考〕

*源氏抄のこと、日下幸男「中院通村の古典注釈」(みをつくし)創刊号、一九八三・一)九頁、同「中院通村と儒学儒者」(みをつくし)五号、一九八七・一〇)一五頁、長友千代治「学者の講筵—中院通村日記—專書有縁(3)」(『日本古書通信』八二五号、一九九八・四、一九頁。『江戸時代の読書と書物』所収)、伊井春樹「源氏物語注釈書・享受史事典」(二〇〇一・九、東京堂出版)に指摘有り。

*加賀での宗彌の評判について、『加賀藩史料 第參編』の万治元年(二六五八)一〇月二日(前田利常、小松城に薨ず)の条に引く「桑華字苑」に、以下の二挿話が載る(宗彌は宗彌とみてよいだろう)。

一、或時微妙院様、越中へ御鷹野に御越被_レ成。今石動にて御旅屋にげんじの屏風立て在。利常公篠屋宗彌にむかはせたまひ、「此絵は源氏とみえたり、大形よき絵なるが、何やらんかつかうあしきやうに見ゆる、宗彌何とおもふぞ」と御意。宗彌かしこまり「御意のごとく、絵は源氏若むらさきにて御座候。扱もたいめいの御目通りは各別の儀にて御座候。如_レ仰此御屏風の絵も、手本の絵と見え申候へ共、かつかう悪敷御座候。上方にて何方に御座候源氏の屏風も、かつかうあしく御座候に付て、各かやうの儀かうしやなる者ども、せんさくを仕たる事にて御座候。昔土佐が筆に、源氏のちいさきおしゑ御座候を、其ちいさき一枚を、加様に屏風いつはいにかき申に付て、何としても小を大にうつし申に付て、かつかうあしく御座候かとせんさく仕たるは、かやうの物に明暮なれ申ての上の儀に候。唯今御覽被_レ成、はやかつかうの悪敷を御覽被_レ為_レ付候事は、ふしぎなる御事」とかんじ奉る。

一、御帰りにくりからの峠にて御休被_レ成、宗彌申上る。「加賀の国を大き成国と奉_レ存候処に、越中の国のおびたゞしき儀、中々日も届不_レ申候。加様の国々をしろしめす殿様は、人間にては無御座」と申、其上在々宿々ふつき安泰にて、家作等諸人の心やすく見え申てい、乍_レ恐けつかうなる御仕置」とかんずる。利常公、

「如し申大国預りて、せめて万民の心安き様にと思ふ外他事なし」と御意。其時宗閑謹而、「扱も難し有御意にて御座候。加様の大国の御主様、御領国を我物と不_レ思召」、御預り被_レ成候とは、我々の心中とは各別の儀なり。京都にて我等の屋敷、おもて口四五間うらえ廿間計御座候。此屋敷は、天の星までも屋敷の上は我等のほしと存て居申に付て、我家の上を鉄砲を打通すを聞ても、腹を立申候。加様の御国を御預り被_レ成たるとおほしめす御心より被_レ仰付「御仕置なれば、万民の心安く罷有も道理にて御座候」と申上たり。此宗閑は京都の町人にて、歌学者源氏説なり。宗閑子今村宗永出頭して、小松にて風氣を煩ひ死たり。父子ともにあいさつとはちがひ大悪人也。 (七三六頁、会話記号・傍線は私意)

「桑華字苑」は前田利常の孫綱紀が座右に置いたいわば雑記帳。綱紀の宗閑父子への評価は傍線部のようにきびしく、これら挿話は口先だけの阿諛を嫌ったものだろうか。但し綱紀は寛永二〇年(一六四三)生れで、宗閑父子はすでに故人である。祖父利常(一五九三～一六五八)からの伝聞か。

〔三九〕元和三年(一六二七)十一月二六日、近衛邸での詩歌会に詩の衆として参加。

〔依拠資料〕「鹿苑日録」同日条。「大日本史料」一二之二八、元和三年雜載六四四頁にも。

〔本文〕「斎了於_二近衛殿_一有_二詩歌御会_一、詩之衆、東福不二庵集雲和尚・龍眠剛外和尚、其他宗禪・奇斎伺候、歌之衆、冷泉院中納言・西洞院・中院・滋野井・松梅院・兼与也、愚詩之題落葉・野亭聞_レ鐘両首也」(五・一八八頁下)。

〔内容〕近衛殿は近衛信尋で正二位右大臣左大将(当時一九歳)。集雲(守藤、東福寺二三三世)。剛外は五山の僧。奇斎、未詳。冷泉院中納言は冷泉為清、西洞院は時慶、中院は通村、滋野井は季吉(元名、冬隆)、元和三年に従四上右中将。松梅院は北野天満宮祠官權昌、紹巴と親しく「北野社家日記」がある。兼与(一五八四～一六三三)は猪苗代家六代の連歌師、細川幽斎門、伊達家に仕え、近衛信尹・烏丸光広らと親交あり。

〔四〇〕元和四年(一六二八)九月一九日、近衛信尋邸での百韻漢和連歌に参加、宗禪一〇首あり。発句、令柔、他に集雲一〇首。

〔依拠資料〕「和漢一会記」(岩国敬古館蔵、〇二・一六・五二)。本書は小型横本(写本一冊、縦二二・四釐、横一七・五釐、紺色表紙、楮紙袋綴、墨付約一〇〇丁)で、天文二〇年から弘治・永祿・天正・慶長・元和にかけての一〇数回の和漢聯句会の記録。挟み込みの紙片にインク書で

「圭斎藏書」とある。岩国吉川家に仕え、京で松水尺五門に学んだ儒学者宇都宮遜庵(一六三三～一七〇七)の子三的が圭斎と号した。

〔内容〕該当の会の記録は墨付五丁分で、内題に「漢和元和四年九月十九日於近衛殿鷹公/宗匠兼与」、本文は「後水尾院/元和四年九月十九日/楓松山別_レ色 令柔」で始まり、宗禪は六句目「以_二景好_一

春遊」以下、計九首を詠む。末尾に「令柔 十一漢 阿野実頭宰相
九〇／兼与 十一和 滋野井季吉朝臣 九〇／梧 十二句〇 慶純
九〇／集雲 十〇 宗嶋 九〇／中暉 十〇 正忠 一〇／宗彌
九〇／漢 四十九句／和 五十一句」と連衆と句数を示す（〇は和、
◇は漢）。

*近衛殿鷹公は信尋、「梧」は信尋をさす。阿野実頭は正三位左中将。
令柔・集雲・中暉（昕叔頭暉、相国寺九四世）は五山僧。慶純は紹巴門
の連歌作者。宗嶋は未詳。宗匠は連歌師兼与。以上〔三九〕〔四〇〕
の句会連衆から宗彌の交際圈が如実に窺われる。

〔備考〕「吉川家寄贈図書類目録」（一九九二・一一、岩国徴古館）一一六
頁、「連歌総目録」七七〇頁。

〔四二〕元和六年（二六二〇）十一月三日、宗彌発起人となり、中院
通村の「百人一首」講釈開く。土御門泰重も聴聞。

〔依拠資料〕「泰重脚記」同日条。「大日本史料」一二之三、五、元和六
年雜載にも。

〔本文〕「雨氣、中院百一人首講尺、予も晚炊以後聴聞申候、サ、ヤ
宗彌発起也」（史料集集二・五七頁）。

〔備考〕通村の「百人一首」講釈については日下幸男「中院通村の古
典注釈」（「みをつくし」創刊号、一九八三・一）参照。

〔四二〕元和八年（二六三二）八月朔後、明人王国鼎（金沢に滞在か）、

宗彌に仕官の斡旋を依頼す。同八月二五日、宗彌への礼と仕官の待遇
についての再度の依頼あり。

〔依拠資料〕池田 温「東アジアの文化交流史」（二〇〇二・三、吉川弘
文館）第三部の三「明人王国鼎の宗彌あて書状について」。本状を紹
介するにあたり、池田氏は「中国において明・清兩朝の交代は一七世
紀早期に生じた重大事変であり、その危難を逃れて日本に渡来した
著名人もいたことはひろく知られている。朱舜水是その最も際立った
存在であるが、（中略）ここに簡単に紹介を試みる王国鼎の二通の書翰
も、変動期の人の移動の一事例を加えるものである」（三三四頁）とし
て、翻字と訓読を載せる。

〔内容〕長文なので本文紹介は省略する。

*一通目は「壬戌（二六三二）之秋八月朔後、友弟王国鼎頓首排書、
大詞伯宗彌先生大人閣下に奉復す」で始まる。宗彌からの手紙の礼を
述べ、宗彌の詩文の才を大いに称え、晋右軍王羲之の苗裔という自己
の経歴を語り、仕官の斡旋を依頼する。その末尾の辺を引く。「庚申
（二六二〇）に至り安南順化に入り聘に応じて王に医たり。辛酉（二六
二二）東京に過るに舟次にて浅険に墜り、魚腹に葬られて囊橐一空た
り。長崎船長に倚附し日東に遊過られ漂泊してここに至る。ここに半
載風雨聊なく饑渴独り忍ぶ、与自言咲たれどもに歎を為さんや。太
守の不棄を蒙り書を留めて論語するも適国母の登仙に値り
去止^{ゆきやま} 阿難^{あなん}。窮途の阮生を哭き倦遊の王祭を顧み、霸旅放言、
聊か知己を伸べん。伏して乞うらくは伝宣られ、恩に感ずること浅か

らず、来春再び賀陽を過るを容められよ。太守国主殿下に叩謝し併せて知己を萬一に酬ゆるなり」(三九一頁。中島楽章「16・17世紀の東アジア海域と華人知識層の移動―南九州の明人医師をめぐって―」、『史学雑誌』一三三―一二二、二〇〇四・一二二、二九頁により一部訓読を改めた所がある。)

*これによれば、明をのがれた王国鼎は一六二〇年に安南(ベトナム東岸)・順化(ベトナム中部の都市、フヘ)に入り、一六二一年に東京(ベトナム北部、中心はハノイ)を通過、船が難破し長崎の糟長に同行して来日した。その後太守(利常)に拾われる。国母の登仙は、書簡の日付から考えて元和八年(一六三二)七月三日の前田利常夫人天徳院没(加賀藩史料二・四八二頁)(葬儀は八月八日)をさすだろう。来春も賀陽(金沢)で過ごせるよう斡旋して欲しい、というのである。

*二通目は八月二五日付け。宗廟に会え言葉が通じたこと、酒を酌み交わしたことを喜び、太守(利常)に引き合わせてもらった礼を述べた。「昨太守公を辞し帰らんと欲するに嘉意命済を承け、藤中務・松原内匠助二公僕を留めて門下客と為し賜わるに……」とある。前田家中の藤中務・松原内匠助に預けられたのであろう。がその後で俸給の少ないことを嘆き、昇給を願う少しくあつかましい内容である。

*藤中務は未詳、松原内匠助は、「有沢氏覚書」に「利常公御代元和二年六月廿二日有沢采女被三召出」。(中略)則其時分出頭御右筆松原内匠に、人々の名を書付可申旨にて、「(加賀藩史料)第二編、四二五頁」とある人物だろう。「石川県姓氏歴史人物大辞典」(一九九八・二二、角川書店)には慶長一六年前田利長に仕え一六〇〇石とある(四三三八

頁)。

*「加賀藩史料 二」の慶長一九年(一六二四)五月二〇日に「前田利長越中高岡に薨ず」という死亡記事があり、「前田利長行状」として記事が列挙される中の「又新斎日録(ゆうしんさいにちろく)」に次のような記事がある。

一、瑞龍公(利長のこと)慶長中大明の儒者王伯子を召し、金府に置せらる。其證あり。今越中瑞龍寺に蔵する、和人の畫せる鷹の屏風十六枚に、王伯子書賛あるもの遺存す。又金府の医師津田約阿弥所蔵之金扇面に、山水を畫し、詩題も有て甚適逸也。其終に日本慶長某年某日大明王伯子寓加陽旅舎題すと書し、其扇面の金色も甚古色なりしが、今はなし。(*)貧窮したるとき売りとると語る、惜むべき事也。瑞龍寺屏風の書賛に印二顆あり。上の印に王印柱の三篆は見ゆれども、詭の篆考べからず。下の印は國鼎氏と見ゆ、伯子の字なるべし。十六枚とも、其筆力優逸可稱也。但題詩は唐詩なども雜り見ゆれば、伯子自作には有まじ(二一六頁)。

また「金沢古蹟志」巻九の「程乘屋敷」(兼六園・蓮池内)の項に、「又新斎日録」の(*)までとほぼ同じ記事があり、その後には、

又金沢販薬所中屋彦右衛門家にも、二十四孝の画の賛を伯子肉書する屏風あり。画は狩野元信と云ふ。此の外古董郎の手に在つて往々見るもの四五度に及ぶ。多くは式紙の大きき程に、語勢勇壯の一兩句を書きたるのみにて、全詩のものを見る事なし。といへ

り(第四編、一五頁)

とある。これらの記事は、上記書簡の王国鼎と何らかの関係があるろうとは思われるが、問題は年代が齟齬することである。慶長一九年の利長没以前に既に仕官していたことになるが、宗彌あて書簡では一六二〇年(元和六年)に安南順化に入ったとあり、矛盾する。「又新斎日録」は文政七年(一八二四)七月二三日、六四歳で没した書写役人湯浅進良が著した考証隨筆で、かなり後年のものだけに誤伝が混じる可能性は高い。早くに慶長年間前田利長の許に仕えたが、失職したので宗彌にすがろうとしたかとも想像できるが、書状の方が資料的価値は高いと見るべきだろう。ただ仕官希望者の就職斡旋依頼だけに、誇大表現があるかもしれない。また、本状は利常の学芸面でのいわば非常勤顧問とでも言うべき宗彌に宛てた、個人的なものだけに他の加賀藩関係者の目に触れたとは考えにくい。

〔備考〕王国鼎に言及するもの、以下を管見。

*「稿本金沢市史学事編第一」(一九七三・七、名著出版)は「日本教育資料に曰く」として「唯朱明帰化ノ人王伯子ヲ聘シ、金沢ニ來寓セシム、然ドモ徒ニ顧問ニ充ルノ外、左右数名ノ徒学スルニ過ギズ」(三頁)とあるが、依拠資料未詳。大庭脩「古代中世における日中関係史の研究」(一九九六・二、同朋舎出版)はこれを引く。

*「増補改訂 加能郷土辞彙」(一九七九・六、北国新聞社)は王伯子を立項し、その後半は上掲二書の記事に同じ、前半を引く。

名は国鼎、伯子はその字である。明の遺播の臣で我国に流寓した

ものであつたが、慶長中前田利長は之を聘して、城外蓮池園に居らしめ、衣食の資を給して優遊せしめた。凡そ明儒の帰化したる者、尾張の陳元賛は寛永中に在り、水戸の朱舜水は万治中に在るから、伯子は之に先だち、異邦の儒者の諸侯伯に仕へた第一人者であつた。利長又当時我が邦で重刊した四書に謬誤多きを憂へ、伯子をして之を校正して公にせしめた(以下略、一〇八頁)。

四書校正のことなど、拠る所あろうが未確認。

*「石川県姓氏歴史人物大辞典」も王伯子を立項し、「増補改訂 加能郷土辞彙」の記事をほぼ踏襲する(八一頁)。

〔四三〕元和八年(一六三三)十一月、勅により急提東下の中院通村に七言詩を贈る。

〔依拠資料〕高梨素子編「中院通村家集 上」(古典文庫六二四、二〇〇〇・五)、「大日本史料」一二之四九、二三三頁。

〔本文〕「元和八年十一月、にはかに勅をうけ給はりて関東に下向せしに都をたちし日、宗彌法師をくりし

一六一二 離別忿々情苦艱 官梅不レ発待ニ君還一 高才正識相類聚

吟伴扶桑第一山

出門のおりなりしかは、落句の韻はかりを和し侍りし

一六一三 忘れすはかそへても程もなくかへりこん日の逢坂の山

おなしくかきそへつかはしはへりし

一六一四 かきすつる筆もとりあへす勅なれはいとまかしこし道いそ

くとして」(古典文庫三三三頁)。

〔内容〕この年一月二日、中院通村は、徳川秀忠の江戸城本丸移徒を賀すため、勅使として東下、この日京を出立(『大日本史料』一二之四九、二三三頁所引「資勝卿記」)。宗禰の詩に「官梅」とあるのは、通村が勅使であることを意識してである。一月二三日江戸城で秀忠に謁見、同一六日江戸を出立(『家集』一六三詞書)、同一七日帰洛。〔備考〕この項、日下幸男「中院通村と儒学儒者」(『みをつくし』五号、一九八七・一〇)一五頁に指摘あり。

〔四四〕元和九年(二六三三)二月、宗禰、松永尺五とともに加賀へ赴く。

〔依拠資料〕『尺五先生全集』第九卷「宗禰先生誄并叙」(徳田武編集解説「尺五先生全集 近世儒家文集集成 第一巻」二〇〇〇・一〇、ペリカン社、所収)一八五〜一八七頁。

〔本文〕「癸亥冬の暮、吾を誘ひ北征し、晨に問ひ昏に定め、館を同くして随行、清容薫陶篤情に親炙す」。この歳、尺五は三二歳。おそらく宗禰はその倍以上の年長だったろう。

〔内容〕「宗禰先生誄并叙」は尺五執筆の宗禰追悼文で重要だが長文のため、取意による概要を示す。宗禰の死を悼む辞で始まり、幼年から資質に優れること(「神童の淑姿重瞳を相備ふ」という)、青年期の勉学のさまを称え、彼の許に多くの門人が参じたとする。肥後侯に招かれ渡海したが、侯の没を悼んで帰洛後は、「俗を避け塞に居し、上は聖人

を師とし下は群讖を友と」した。さらに北の太守の招聘を受けその国で儒雅を推奨した。そして、癸亥冬の暮、尺五は宗禰に誘われ加賀に赴き、その間親しく宗禰の人となりに接し詩作も共にした。「余恩紛絃慈愷鴻臚、蕪詞何を云んや」と宗禰への感謝を記す。帰洛後、再会し未だ疲れの残る頃、宗禰は初めて隠居の地を龍安に定め、僧房を創建、尺五は閑雅な新居を訪い歓談したが、まもなく病を発し没した、という。

〔備考〕

*松永尺五(二五九二〜二六五七)は貞徳の子、名は昌三。藤原惺窩門の四天王の一人。京に私塾を開き、木下順庵・貝原益軒らを育てた當代きつての儒者。諸侯に招かれ特に加賀の前田家には礼遇された。

*「舜旧記」元和一〇年正月二四日条に、年賀として「次勝遊(松永へ箱入扇二、ヘウタン一ツ、昌三(松永)へ泥絵色紙十枚遣也、去年ヨリ加州へ越二依、親父へ申遣也」(史料纂集六・一五二頁)とあり、昌三は元和九年(二六三三)冬から一〇年春にかけて在加賀らしい。この件、小高敏郎「松永貞徳の研究」(一九五三・一一、至文堂)一九四頁、島本昌一「松永貞徳 俳諧師への道」(一九八九・三、法政大学出版局)一六八頁に指摘あり。寛永元年(二六二四、元和一〇年は二月三〇日に寛永と改元)四月二六日に、在京の昌三は梵舜を訪い、年頭の祝いの返札を贈っている(六・二六八頁)。なお慶長一九年(二六一四)正月二一日(四・八五頁)、元和九年(二六三三)二月二日(六・八二頁)・二七日(六・八五頁)、三月一四日(六・八九頁)に昌三は在京の記録あり。

【賀州行記】について

柿衛文庫蔵写本一冊「賀州行記」(五九〇・七〇四、墨付二丁、以下「賀州」と略称)は「国書総目録」で宗磧の著作として検索できる、おそらく唯一の書である。内題「賀州行記」の下に「寛永八辛未」とあり、「三月三日出京」と題する昌三(松永尺五、以下「賀州」の表記に従い昌三と称す)の七言詩から始まる。詩数は合計七六首で、内訳は昌三が六五、宗磧が七、道春(林羅山)が二、長嘯(木下)が一、他に昌三と宗磧の聯句が一、と昌三の作が大部分をしめる。日下幸男「中院通村と儒学儒者」(「みをつくし」五号、一九八七・一〇)は「宗磧は寛永八年に松永昌三、林羅山、木下長嘯と共に「賀州行記」一冊を著している(国書総目録)」とするが、寛永八辛未は一六三一年で、後述のように宗磧は寛永二年(一六二五)既に没しているのである(四八)。

この疑問は「尺五先生全集」巻之六および巻之二とを併せ見ることなどで水解する。「全集巻之六」は賀州・有馬温泉・関東武州・加州小松など、計一一の紀行の折の詩から成る(「全集」解題・解説(徳田武)二頁参照)。「賀州」の全七六首は、「尺五先生全集」と比較した結果から言えば、三つの部分から構成される。説明の都合上、仮に番号を付し表示する。

【賀州行記】	【尺五全集 卷六】賀州	【尺五全集 卷二】北征
1~6	○	×
7~8	×	○
9~11	○	×
12	×	○
13	×	×
14・15	○	×
16	×	○
17	×	×
18・19	○	×
20	×	○
21	×	×
22	×	○
23	×	×
24~26	○	×
27	×	○
28	×	○
29	×	×
30	×	○
31	×	×
32	×	○
33~44	○	×
45~70	【尺五全集】巻六遊覧○	
71~76	依拠未詳	

【賀州行記】と【尺五全集】巻六・巻二
(○は詩あり、×はなし)

「全集巻之六」と比べたところ、まず一首目から四四首目までは、「全集巻之六」の「賀州紀行 寛永八辛未」とある二八首がすべて採録され、途中に五箇所(網掛の部分)にそれには載らない一六首が配されている。この一六首はいずれも宗磧と昌三との唱和で、このうち昌三作の八首、および昌三・宗磧の聯句は、そのままの順序で「全集巻之二」の末尾近く、「北征紀行時先生与三洛之儒生宗磧・偕行訪加州太守」と題する部分に載る。「賀州」は昌三と宗磧の唱和をそのままの形で載せるが、「全集巻之二」はそこから宗磧作を除いているのである。すなわち「賀州」は寛永八年の昌三の加賀行き折の詩と、元和九年冬の昌三・宗磧の加賀行きの詩とを混合した構成をしており、「全集巻之二」は宗磧作を除き全集としての体裁を整備したのである。このことは詩から読み取れる季節の表現からも明らかで、1~6は桃

柳・春風・春曙・春色とあるのに、7・8では雪が詠まれ同時期の作でないことを示している。

次に四五首目から七〇首目までは、「全集巻之六」の五番目に収められる「賀州遊覧」の二六首にそのまま該当する。64昌三の詩題に「竜安老医之佳韻に和す」(九ウ)〔全集巻之六〕は「竜安」を「就安」とする。一二九頁とあるのは、龍安寺の老医者を意味するもので宗禰の履歴に符合し、少なくともこの一首は宗禰に同行した時の作と言えよう。他の二五首がすべて宗禰と行を共にした際の作かは疑わしい。というの、例えば45の題に「夏五十三日於賀之金沢遊東禪之諸院」とあり、冬ではない別の機会のものであろうし、55に「辛未五月廿六日夜於賀之旅亭一夢一絶句」とある辛未は寛永六年(一六三二)で、宗禰はすでにこの世の人ではない。この部分も昌三の何回かの加賀行きで混成されているのだろう。

「賀州」の七一首目から七六首目までは、昌三三首・道春(林羅山)二首・長嘯(木下)一首と著名人の作が並ぶ。依拠する所未検だが、うち道春詩をめぐって、寛永六年、林羅山が木下長嘯子を訪問した日付が「羅山先生詩集」と「賀州」とで相違することについて、津田修造「木下長嘯子資料雑編(四)」(江戸時代文学誌)八号、一九九一・一二、柳門舎)が問題にしている。以上のように「賀州」は尺五の詩集の草稿的なものをもとに再構成したもので、寛永八年は宗禰加賀行き年次を示すものではない。

〔四五〕元和九年(一六三三)二月二日、宗禰の子に甚蔵あり、加賀から届いた書物表紙の件で中院通村の許に出入りする。

〔依拠資料〕「中院通村日記」同日条(東京大学史料編纂所、二三七三・一三・二)。

〔本文〕「及黄昏」経師藤蔵来、自加州「書物表紙被」詠之、仍申付、宗禰子サ、ヤ甚蔵今朝来、然而経師依「遅参」帰宅也、仍又以「使者」招之、亥下刻経師帰了、表紙絹等打裏張付之後帰之、甚蔵先「是」帰宅了(九オ)。

〔内容〕「加州よりの書物表紙」とは、同日この条のやや後に載る「統後撰」「新統古今」「惠慶集」「入道右大臣集」などを指すだろう。この文面から判ずるに甚蔵は紙や絹などの装丁関係のものを用意したか。

*〔一〇〕の甚蔵と同一人物だろう。

〔四六〕寛永元年(一六二四)九月九日、宗禰、重陽のこの日、松永尺五に菊花の詩を寄せる。尺五、七言詩五首を返し、添削を請う。

〔依拠資料〕「尺五先生全集」第四卷(徳田武編集解説「尺五先生全集」近世儒家文集集成 第一二巻、二〇〇〇・一〇、ペリかん社、所収)九四・九五頁を訓読。

〔本文〕

尺五先生全集 巻之四 詩類七言絶句

宗禰寄する所の菊花之詩に和す 并に叙

甲子重陽の節、吾が友宗彌公論問を賜ひ菊花を賞めらる、宿憶奮迫にして懶怠居然、佳節之祝忱を誼れ、黃花之詩篇を闕く、其の連日又辱く惠示せらる、瓊瑤目を奪ひ高調耳を驚かす、固に謝識の測る所俚才の與にする所に非ず、夫れ階て及ぶべからざる者歟、殺風景之嘲り、鄙心野態之譏、既に之に当れり、

然と雖も菊其の思ふこと無んや、曩に吾口を緘じ、吾心に萌さず、將た汶々たる汚辭を嫌んや、將た先づ察々たる高詩を聞んとするか、將た荆公之説を無からしめんや、將た隱逸者にして名聞を絶つや、

予れ欧公之才無し、則ち風艷之清製を知らず、誰人諛訛を加んや、陸氏芳声を簾翰に摘き、張氏殘香を賦藻に余す、豈に隱逸にして名聞を絶つ者ならんや、然れば則ち汶々たる汚辭を嫌ひて、先づ君の察々たる高詩を聞んとする者か、宜かなや名を屈陶に齊し、跡を経譜に照らすこと也、微之は開て後の花無ことを惜み、鄭谷は秋香の未だ衰ざるを歎く、公の意茲に在るか、

春初沉痾を罹し已來、久く鉉軋を事とせず、慈誨之懲懲に駭き、頰りに尖頭奴を呼び、樸楸を聚て、韻脚を支ふる者五絶、伏して雌黃を乞ふ、

病裏空しく佳節を過ぐ、
金章坐を照らして忽ち驚猜す、
番風愧づべし詞花の発ことを、
菊葩に後ると雖も猶梅に先づ、
奇才菊を賦し吾に寄す、
筆硯塵を吹き眼竊猜す、

喜び見る小乗僧様の賦、
高風孰か有て江梅を比せん、

黃花を折送して句を招く、
我れに瓊玖無く又何ぞ猜まん、
丈夫の出処皆道に由る、
吟じて正風に作り標つるもの梅有り、

北嶺曾吟す帰なん去來、
儒游自適愁猜靡し、
老榮少頭人に向て説く、
晩節の黃花第一の梅、

劉岳顔を開き箔に入る、
朝猿暮鶴更に猜無し、
霜中東籬の菊を索すと雖も、
雪底先づ知る北野の梅、

〔内容〕寛永元年（一六二四）、松水尺五は三三歳、この年春初から病で久しく文字を書かず。九月重陽、宗彌が菊花の詩を寄せ、これに對しつとめて筆を執り七言絶句五首を作り、添削を乞う。

〔備考〕第四作目の「老榮少頭人に向て説く、晩節の黃花第一の梅」というあたり、宗彌の出処進退のさまを称えるものか。

〔四七〕寛永元年（一六二四）一〇月二日、土御門泰重、中院通村同道し龍安寺を訪う。終日、宗彌接待をなす。

〔依拠資料〕「泰重卿記」同日条。

〔本文〕「龍和寺へ中院同道參、宗彌所終日振舞、帶夕陽帰宅也」
〔史料集二・二四三頁〕。

〔内容〕この日二人は賀茂宮(後水尾天皇皇子、元和四年(一六二八)生れ、元和八年一〇月二日没、五歳)の三回忌につき二尊院(嵯峨)を参詣、さらに大沢の楓樹の紅葉を「近比奇観甚也」と称え、その足で龍安寺に参詣した。宗綱が龍安寺に居たことを証す貴重な、そして彼の存命中最後の記事である。

〔四八〕寛永二年(一六二五)六月三日、宗綱没。

〔依拠資料〕①「大雲山誌稿」二二「多福」。②「宗綱先生誄并叙」(四四)に同じ。

〔本文〕①「雲宗綱居士 俗称未詳、初以儒仕加藤清正朝臣、大阪方敗北後、祝髮寓「居多福」、為「檀越」、寛永二年乙丑六月三日卒」(四八オ)。

②「寛永二年六月三日庚辰井口氏宗綱老儒卒、嗚呼哀哉」(一八五頁)。
〔備考〕伝蔵の西源院本「太平記」は、宗綱の遺言により龍安寺中西源院本の蔵となる(彰考館蔵「参考太平記凡例稿本」)。②から宗綱が井口氏とわかる。

〔四九〕中院通村、宗綱の死を悼み百箇日に和歌を詠む。寛永二年秋。

〔依拠資料〕高梨素子編「中院通村家集 下」(古典文庫六四三、二〇〇〇・六)。

〔本文〕「宗綱法師百ヶ日 なへてふる比をもまたすしくれけり雲もかなしき別をや思ふ」(一六四六)(三三三頁)。

〔備考〕(四八)の忌日(六月三日)から考えると九月中旬か、詞書・歌意に矛盾しない(寛永二年は閏月なし)。

〔五〇〕寛永一八年(一六四二)一月二五日、宗綱息宗栄没。

〔依拠資料〕「大雲山誌稿」二二「多福」。

〔本文〕「向齋宗栄居士 宗綱男寛永十八年壬午正月十五日卒」(四八オ)。

〔備考〕宗栄は甚蔵(四五)の出家後の名か、また(三八)所引の「桑華字苑」に「宗閑子今村宗永出頭して、小松にて風氣を煩ひ死たり」とある記事とどう関係するのだろうか、未詳。

〔五一〕明暦二年(一六五六)ころ、多福文庫類廃。

〔依拠資料〕「大雲山誌稿」二二「多福」。

〔本文〕「多福文庫／宗綱再興多福院側構「書庫」、蔵「和漢書」焉、嗣之／曾孫者散失 蔵本無(毎)巻首押「多福文庫四字朱印」也、／(一字下)今西源所蔵秦漢印統之書、亦多福文庫之内矣、／讓天老漢頃年於「市間」得「斯印」書數本、以置「西」源「焉」、旧記曰「多福文庫明暦二年類廢」(四八ウ)とし、「多福文庫」の印記と簡板の図を載せる(文政一一年まで残存、四九オ)。

〔備考〕

*「多福文庫」の印記は、渡辺守邦・島原泰雄編「影印改編・博愛堂集古印譜」(調査研究報告)五号、一九八四・三、国文学研究資料館)の第

一 一藏經書印之部のNO 87に影印が載り「孟子古写本所印 龍安寺々々多福庵又或武藏多福寺右二説」(二五九頁)とある。他に渡辺守邦・後藤憲二編「新編藏書印譜」(二九九一・一、青雲堂書店)二九四頁、「集古十種」印章之部(国書刊行会本、五二九頁)にも掲載。

* 文庫の散佚、そして市場に流出した該文庫の本を関係者が買い戻す件など、いつの世にも変わらぬ、主を失った藏書の運命を物語る記事である。

〔その他年次未詳〕

「図書寮叢刊 智仁親王詠草類 二」(二〇〇〇・三)の二六四頁下に「桂宮文書智仁親王詠草 六十七 宗磧……七句」、三〇三頁下に「桂宮文書智仁親王詠草 六十八」の六三八四に「牡丹新発自無塵 野客詩「恩賜宴辰」／宿雨想応「傳霖(岩) 雨」 花王得「佐十分春」 宗磧」とある。また三三四頁下に「桂宮文書智仁親王詠草 七十一」 「仲秋十四日於臨川寺」として四五二四の聯句に「先節菊灯点 宗磧」とある。

結び

「参考太平記凡例稿本」の一行の記事をきっかけに、永らく宗磧の事績を追ってきたがこのあたりで一区切りをしたい。俗姓井口氏、近江の出身とわかったものの年齢は未詳。「一〇」で触れたように仮に

一五五〇年頃の生れとすれば、一六二五年には七五歳で没年として不自然ではない。早くに林羅山・里村紹巴・惟杏永哲・剛外令柔・文英清韓・中院通勝父子・烏丸光広・西洞院時慶・智仁親王・加藤清正らと知り合い、彼の交際圏は儒学・連歌界・五山禅林・公卿・官廷・武家と広範囲に及ぶ。またこの時代、儒と医とがきわめて近いものであったことは夙に小高敏郎氏、近く福田安典氏らが説くところで、施薬院宗伯・曲直瀬玄朔・西洞院時慶などとの交流を考えると、彼も儒医のひとりであったと捉えてよいのだろう。そうした学才が注目され、加藤清正に招聘され、後年また前田利常の招きも受け、京と加賀とを往来した。しかし特定の主に仕えきることをしなかったのは、家が裕福でその必要が切実でなかったためであろうか。或いは肥後で清正没後に味わった惨めさに懲りたゆえだろうか。晩年、西源院の傍に多福文庫を構え群書を集め得たのは、援助者があったにしても経済力の豊かさを物語るものだろう。羅山・松永尺五が宗磧の学識に畏敬の念を払っていること、また智仁親王への講釈の事績なども、彼が当代の第一級の文化人に伍した存在であったことを窺わせ、慶長・元和の頃の京における儒者・文学者として高い評価を得ていたものと思われる。

活字本によった「時慶記」の未刊部分、「中院通村日記」の未見の箇所、また三〇余通の所在不明の宗磧宛書簡、同書簡の未解説のもの、その他資料によって、彼の事績の解明には残された余地は多く今後を期す他ない。

結びにかえて宗廟に関する各項の、直接関係者()内は宗廟宛書簡発信者)・年次・関連人物・書名を一覧しておく。

細川幽斎 伊勢物語・詠歌大概

大琳公

- (一) <里村紹巴> 文禄二年(二五九三) 二月三十一日
- (二) <玉仲宗瑋> 慶長九年(二六〇四) 以前の三月一日
- (三) <惟杏永哲> 慶長七年(二六〇二) かそれ以前の八月六日
- (四) 西洞院時慶 慶長七年(二六〇二) 八月二〇日
- (五) <惟杏永哲> 慶長七年(二六〇二) かそれ以前の一〇月一日
- (六) <惟杏永哲> 慶長八年(二六〇三) かそれ以前の正月一八日
- (七) <剛外令柔> 慶長一四年(二六〇九) 九月以前の八月二七日
- (八) <中院通勝> 慶長一三年(二六〇八) 六月一〇日
- (九) <中院通勝> 慶長一三年(二六〇八) 八月二日
- (一〇) <梅仙東通> 慶長一三年(二六〇八) 一〇月二七日以前
- (一一) 加藤清正 慶長一四年(二六〇九) 三月一日 百韻連歌
- (一二) 西洞院時慶 慶長一四年(二六〇九) 五月七日 加藤清正
- (一三) 智仁親王 慶長一四年(二六〇九) 一〇月 三略
- (一四) 中院通勝 慶長一五年(二六一〇) 三月二五日以前
- (一五) <烏丸光広> 某年八月九日
- (一六) <文英清韓> 某年正月二七日
- (一七) <文英清韓> 慶長一六年(二六一二) 二月
- (一八) 加藤清正 慶長一六年(二六一二) 六月 清正追悼
- (一九) 無名子 某年(慶長一六年九) 九月
- (二〇) <文英清韓> 某年二月一七日 左兵・秀頼
- (二一) 烏丸光広 慶長一七年(二六一三) 九月九日 相国寺和尚
- (二二) <林羅山> 慶長一七年(二六一三) 一二月下旬 施薬院宗伯
- (二三) 林羅山 慶長一七年(二六一三) 一二月下旬
- (二四) <林羅山> 慶長一八年(二六一三) 九月二一日 八条親王
- (二五) 智仁親王 慶長一八年(二六一三) 八月九日 (コマデ(上))
- (二六) 西洞院時慶 慶長一九年(二六一四) 三月八日、一五日 延寿院・教学院三位
- (二七) 玄仲 慶長一九年(二六一四) 七月中旬
- (二八) 中院通村 慶長二〇年(二六一五) 一月二日 源氏物語・松風
- (二九) 智仁親王 元和元年(二六一五) 八月八日から 孟子
- (三〇) <休閑> 某年九月二日 意安法眼 剛外和尚
- (三一) <水宿子長向> 某年三月二四日
- (三二) <中院通村> 某年 万葉集、源氏・紅梅

- 〔三三〕 中院通村 某年
 〔三四〕 中院通村 元和二年（二六一六）三月二九日
 〔三五〕 智仁親王 元和二年（二六一六）五月二日・六月三日
 〔三六〕 中院通村 元和二年（二六一六）五月三日 新上東門院 史記
 〔三七〕 智仁親王 元和二年（二六一六）九月七日
 〔三八〕 中院通村 元和三年（二六一七）五月一三日
 〔三九〕 近衛信尋 元和三年（二六一八）十一月二六日 松平筑前守 源氏抄
 〔四〇〕 近衛信尋 元和四年（二六一八）九月一九日 剛外・集雲他 詩歌会
 〔四一〕 中院通村 元和六年（二六二〇）十一月二三日 剛外・集雲他 百韻聯句
 〔四二〕 王國鼎 元和八年（二六二二）八月二日・二五日 土御門泰重 百人一首 前田利常・松原内匠助
 〔四三〕 中院通村 元和八年（二六二二）十一月
 〔四四〕 松水尺五 元和九年（二六二三）二月
 〔四五〕 中院通村 元和九年（二六二三）二月二日 甚藏
 〔四六〕 松水尺五 寛永元年（二六二四）九月九日
 〔四七〕 中院通村 寛永元年（二六二四）一〇月二日 土御門泰重
 〔四八〕 宗磧 寛永二年（二六二五）六月三日没

〔四九〕 中院通村 宗磧百箇日の頃

〔五〇〕 宗磧 寛永一八年（二六四一）一月一五日落

〔五一〕 多福文庫類聚 明暦二年（二六五六）頃

〔付記〕

資料閲覧および複写などに際し御高配を賜りました。岩国徴古館・柿衛文庫・金沢市立玉川図書館近世資料館・東京大学史料編纂所・龍安寺西源院、その他諸機関に深く感謝申し上げます。また書簡〔三〕〔三〇〕の読みについて、酒井一氏の御教示をいただいた所があり、併せて記して厚くお礼申し上げます。

[Shigeyuki NAGASAKA, A note on Sasaya Soukan:]

Achievements of an early modern scholar (the last part)]